一般県道飯江長田線関係埋蔵文化財調査報告2

赤坂古墳群2

福岡県みやま市山川町清水所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第２２０集

序

本書は、一般県道飯江長田線の道路改良事業に先立って福岡県教育委員会が発掘調査を実施したみやま市に所在する赤坂1号墳の発掘調査報告書です。

赤坂1号墳は、平成12年度にも発掘調査が実施され周溝が検出されていますが、今回はその延長部分が確認され、周溝内からは良好な状態で埴輪や須恵器が出土しました。埴輪には円筒埴輪の他に人物埴輪や盾形埴輪が含まれており、貴重な発見といえます。残念ながら古墳の墳丘は大部分が削平されていますが、盛土の構築状況が確認できる成果も得られました。

今回の発掘調査によって得られた成果が永く活用されることを願うものであり、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査・報告書作成の過程で、地元の方々をはじめとする関係各位の皆様の御協力が得られましたことに深く感謝いたします。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会教育長
森 山　良 一

例　　言

1　本書は、一般県道飯江長田線道路改良事業に伴って平成18・19年度に発掘調査を実施した福岡県みやま市山川町清水所在の赤坂古墳群（赤坂1号墳）に関する調査成果報告である。

2　発掘調査・報告書作成は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、発掘調査・報告書作成に関してみやま市・同教育委員会の多大な御協力を得た。

3　遺構の実測・遺構写真の撮影等の現場作業は調査担当者を中心に行った。出土遺物の整理・復元は九州歴史資料館において行った。遺物の実測・製図をはじめとする報告書作成作業は福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において行った。

4　出土遺物・図面等の記録類は福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において所蔵・管理される予定である。

5　空中写真は(有)空中写真企画に委託し、気球による撮影を行った。遺物写真は九州歴史資料館において撮影した。

6　本書に用いた地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「野町」である。

7　本書の執筆はⅡを下原幸裕が、それ以外を岸本圭が行い、編集は岸本が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　3　発掘調査・報告書作成の体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅱ　地理的・歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Ⅲ　発掘調査の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　1　墳丘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　2　周溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　3　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Ⅳ　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　1　墳丘について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　2　出土遺物について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　3　古墳築造の時期について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

写　真　目　次

写真1　　確認調査風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
写真2　　残丘上の石室石材 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
写真3　　発掘作業風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
写真4　　空中写真撮影風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
写真5　　中尾1号墳石室現況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

図　版　目　次

図版1　1 遺跡の立地（南上空から）　2 遺跡の立地（北上空から）
図版2　1 調査区とその周辺（上空から）　2 調査区からクワンス塚古墳を望む
図版3　1 調査区全景（南から）　2 調査区全景（上空から）
図版4　1 墳丘調査前状況　2 墳丘断面全景
3 墳丘版築状況
図版5　1 周溝葺石転落状況　2 周溝完掘状況
3 葺石除去状況
図版6　1 周溝堆積状況（A－A’）　2 周溝堆積状況（B－B’）
3 円筒・人物埴輪出土状況
図版7　周溝出土円筒埴輪
図版8　周溝出土円筒埴輪
図版9　周溝出土形象埴輪
図版10　周溝出土須恵器器台

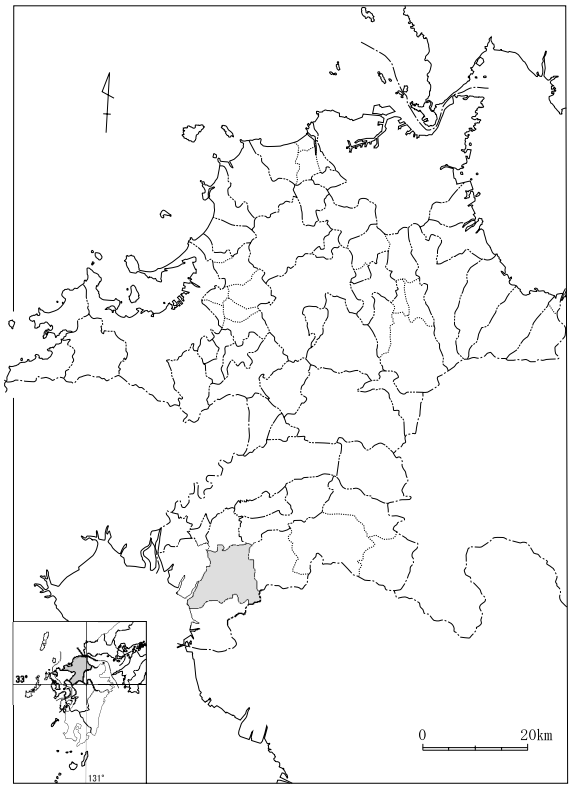
挿　図　目　次

第1図　みやま市の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2図　県道飯江長田線改良工事計画図と調査区の位置 ・・・・・・・・・・・・・・1
第3図　第1～3次調査区配置図（1/500） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第4図　周辺遺跡分布図（1/25,000） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第5図　第2次調査遺構配置図・墳丘測量図（1/200） ・・・・・・・・・・・・・・・9
第6図　第3次調査遺構配置図（1/150）、墳丘土層図（1/60） ・・・・・・・・・・10
第7図　葺石検出状況実測図（1/40） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第8図　周溝土層断面図（1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第9図　墳丘表面採取遺物実測図（1/3） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第10図　周溝上層出土遺物実測図（1/3） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第11図　周溝出土遺物実測図①（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第12図　周溝出土遺物実測図②（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第13図　周溝出土遺物実測図③（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第14図　小正西古墳の人物埴輪（1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第15図　周溝出土遺物実測図④（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第16図　周溝出土遺物実測図⑤（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第17図　周溝出土遺物実測図⑥（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第18図　馬埋葬土壙出土土器実測図（1/3） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第19図　赤坂1号墳とクワンス塚古墳の墳丘比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・23

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

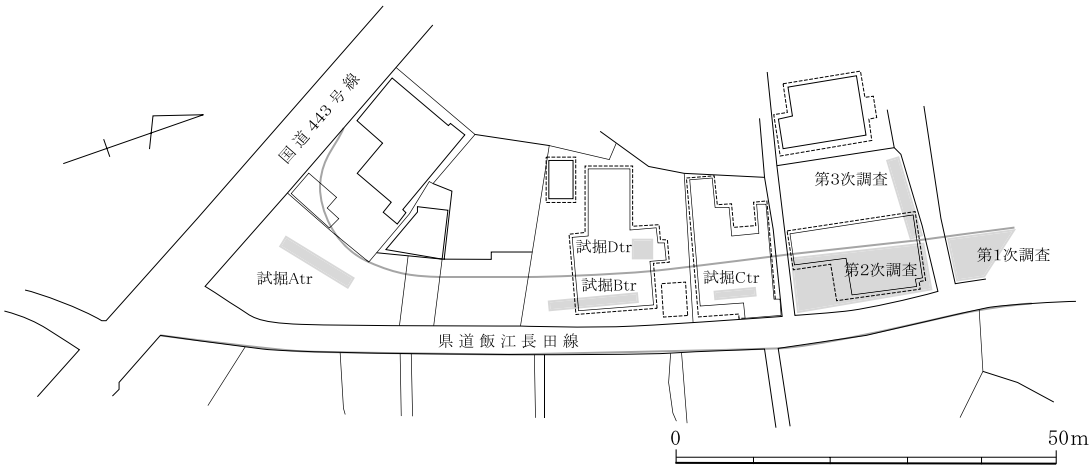
一般県道飯江長田線（県道774号線）は、みやま市高田町飯江の県道94号線高田山川線交差点を起点とし、同市山川町を経由し、同市瀬高町長田の国道209号線交差点を結ぶ延長5,547kmの県道である。みやま市山川町野町では国道443号線と交差するが、国道209号線を南下して国道443号線へと抜ける最短ルートとなっていることから交通量は多い。また数年後に供用予定となっている瀬高インターチェンジ（仮称）へのアクセス道となる県道本吉小川線とも交差するために、将来的にも交通量の増加が見込まれている。しかしながら、道路幅が狭小な区間も多く、幅員拡幅が求められていた。



第1図　みやま市の位置

平成17年度に県教育庁総務部文化財保護課から関係各課への次年度各種開発事業の照会の中で、福岡県柳川土木事務所からは一般県道飯江長田線道路改良事業の計画が挙げられた。当該地は平成12年度に本発掘調査を実施した赤坂古墳群の隣接地であり、当時検出された古墳の延長が検出できる可能性が高いと判断されたために、山川町（現　みやま市）教育委員会との協議を経て発掘調査が必要である旨の回答を行った。

平成18年度当初は用地買収が完了しておらず、発掘調査等の対応は用地等の諸問題が解決してから対応することで協議を済ませた。その後、用地買収が終了したが、構造物の撤去が時間を要し、調査の依頼があったのは平成18年の秋頃となった。発掘調査の体制については

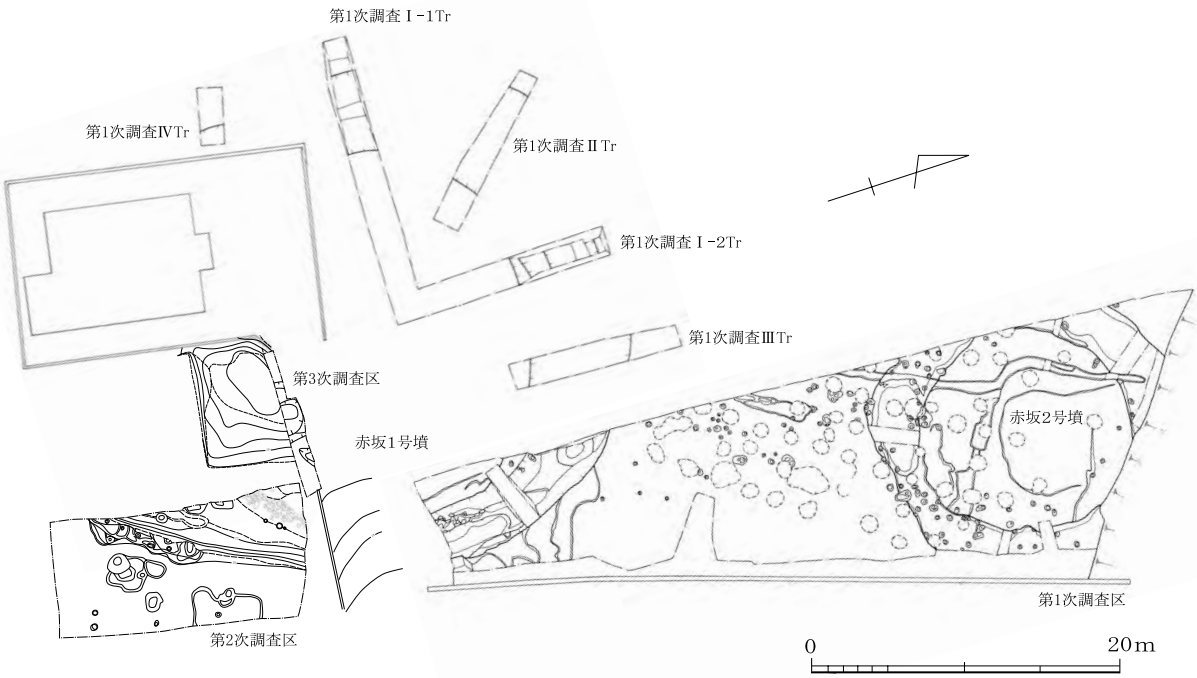


第2図　県道飯江長田線改良工事計画図と調査区の位置（1/1,000）

地元山川町教育委員会が対応することも含め協議を進めていたが、同年度の後半、1月29日に山門郡瀬高町・三池郡高田町との合併を控えており、それに向けての協議・体制づくりが多忙を極めていたために県教育委員会で対応できないかどうか協議をすすめた。しかし県教育委員会でも各地で発掘調査を行っており、職員の配置が困難な状況であったが、隣接する瀬高町にて県道本吉小川線の道路改良事業に伴う発掘調査を実施しており、その作業を切りの良いところで中断し、数日間をあてて県道飯江長田線関連の発掘調査を実施することで協議をすすめた。

写真1　確認調査風景

調査はまず遺跡のひろがりを決定するための確認調査から実施した。確認調査は平成18年12月21日に行った。確認調査は事業照会地に3本のトレンチをいれることにより行った。また、今回の事業により家屋の建て替えとなった箇所の浄化槽設置部分についても併せてトレンチを設定して実施した。なお、家屋本体については遺構面に影響がないと判断されたために調査を実施していない。トレンチの配置は第2図の通りである。確認調査の結果、小ピットがある程度検出されるものの、掘削の結果ごく浅く遺物も出土しないために慎重な工事を実施するよう依頼し、平成12年度に調査を実施した地点の隣接地（清水1415番地）について本調査が必要との回答を柳川土木事務所長あて行った。



第3図　第1～3次調査区配置図（1/500）

2　調査の経過

確認調査の結果をうけて、早急に発掘調査の体制を整え、平成19年1月23日から重機を用いた表土除去を開始した。2月5日からは発掘作業員とともに遺構検出・遺構掘削を開始した。まずは周溝以外のピット・土坑を掘削したが、数基に留まりしかも近世に属すると判断され、発掘調査は古墳周溝を主とするものとなった。

赤坂1号墳は既に墳丘が削平されているものと考えられていたが、旧宅地内の庭に墳丘の残骸と思われる高まりがあり、頂部には石室材の一部と思われる石材がたてられていた。そこで地権者の了承を得て地形測量を実施した。

道路拡幅部分とは別に、付帯工事として隣接民家へ至る道への擁壁工事があり、それに伴い先に記した墳丘の残骸を一部掘削することが判明した。その部分についても記録保存の必要を説明し調査の体勢をとるよう調整したが、地権者との調整等が遅れ、この部分の調査は次年度に持ち越すこととなった。

発掘作業は順調に進み、2月26日には周溝の底面を確認するに至った。気球を用いた空中写真撮影を予定したが強風のために延期し、3月1日に撮影を実施することができた。その後、葺石実測、葺石除去等の駄目押しを実施し、調査を終了した。3月15日付けで瀬高警察署に埋蔵物発見届を提出し、平成18年度の発掘調査を終了した。

写真2　残丘上の石室石材

写真3　発掘作業風景

写真4　空中写真撮影風景

平成19年度にはいり、地権者との調整が済んだ段階では既に隣接地の工事に取り掛かっていたために発掘調査の体制も早急にとる必要があった。同年度も県教育委員会では職員の配置に苦慮するほど事業量が多かったが、平成18年度同様に県道本吉小川線の発掘調査を中断して体制をとることとした。平成19年度の発掘調査は平成19年8月24日から実施した。墳丘は斜面部分を清掃したような状況でもあったために撹乱が大部分を占めるものであったが、一部には墳丘築造時の版築の状況が確認された。調査は3日費やして図面を含め全

ての作業を終了し、9月3日付けで瀬高警察署に埋蔵物発見届を提出した。

3　発掘調査・報告書作成の体制

平成18・19年度の発掘調査及び平成19年度の整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

	平成18年度 （発掘調査）	平成19年 （発掘調査・報告書作成）
総括		
教育長	森山　良一	森山　良一
教育次長	清水　圭輔	楢崎洋二郎
総務部長	大島　和寛	大島　和寛
文化財保護課長	磯村　幸男（本副理事）	磯村　幸男（本副理事）
副課長	佐々木隆彦	佐々木隆彦
参事	新原　正典	新原　正典
		伊﨑　俊秋
課長補佐	安川　正郷（本参事）	中薗　　宏（本参事）
課長技術補佐	池邉　元明（本参事）	池邉　元明（本参事）
	小池　史哲（本参事）	小池　史哲（本参事）
庶務		
管理係長	井手　優二	井手　優二
管理係	野中　　顯	渕上　大輔
	渕上　大輔	柏村　正央
	柏村　正央	小宮　辰之
	小宮　辰之	野田　　雅
調査・報告書作成		
調査第一係長	小田　和利（本参事補佐）	小田　和利（本参事補佐）
調査第一係	岸本　　圭	岸本　　圭
		下原　幸裕

調査調査から報告書作成に至る過程で、みやま市・同教育委員会からは様々な御援助と御協力を頂いた。また地権者目野繁由氏には発掘調査の趣旨をご理解していただきご協力いただいた。記して感謝の意を表します。

II　地理的・歴史的環境

地理的環境

赤坂古墳群は、平成19年1月29日付けで山門郡瀬高町と同山川町、三池郡高田町の三町合併により成立した福岡県みやま市の山川町清水に所在する。古墳群は、北側を流れる大根川と、南側を流れる飯江川によって開析された、北西方向へのびる扇状台地の縁辺部に営まれている。この台地は熊本県との県境にひろがる筑肥山地の西縁にあたり、東には清水山（標高331m）や御牧山（標高438m）、鷹取山（標高364.3m）などがそびえ、南は障子ヶ岳を中心に山麓が広がる。そのため、遺跡のある台地付近からは北側から西側にかけて有明海までひろがる水田地帯を見渡すことができる。標高は29mほどで、水田面との比高差はおよそ10mである。

歴史的環境

これまで、みやま市域では分布調査などで遺跡の存在は確認されているものの、発掘調査の件数が少なく、遺跡の年代や内容などに関する情報が乏しいというのが実状である。そこで、遺跡の所在する旧山川町内に限らず周辺の遺跡を含め、古墳時代の遺跡の様相について概観する。

まず、古墳時代前期についてみると、集落では海津横馬場遺跡をはじめ山門北池遺跡、山門牛島遺跡、藤の尾垣添遺跡、竹海校東遺跡、大江南遺跡などが発掘されている（註1）。上記の集落のうち海津横馬場遺跡を除いては、少なくとも古墳時代中期前半まで継続しており、調査区外にまで遺構がひろがることを考慮すれば安定した生産基盤のうえに集落が形成されていたことが窺える。

これらの集落に対応する墓は現在のところ確認されていない。方形周溝墓が存在する可能性を指摘する意見もあるが、全く高塚古墳がなかったのか疑問も残る。例えば、分布調査により確認された古墳ではあるが、大根川右岸に所在する九折古墳群中の3号墳は、板石平積みの竪穴式石室を主体部とし、人骨が出土したという。近隣では旧高田町内に営まれた辺良田古墳（註2）が割石小口積みの竪穴式石室を主体部とする前期古墳であることを考慮すると、同様な高塚古墳の存在を想定するのが適当ではなかろうか。

さて、中期では既述のとおり前期以来引き続いて営まれる集落が確認されており、とくに竹海校東遺跡は中期中頃まで継続する。ただし、いずれの集落も中期中ごろないし後半に途絶する。

一方で古墳に目を向けると、返済川流域で墳長55mの前方後円墳である藤ノ尾車塚古墳や、周溝まで含めた径が58mに達する円墳の権現塚古墳といった首長墳が営まれるようになる（註3）。両墳は、権現塚古墳がトレンチ調査を行われただけで詳細は不明であるが、少なくとも中期段階に位置づけられ、5世紀になって造墓の画期が訪れたことが窺える。

ところで、大根川流域では面の上1号墳（赤坂4号墳）が築造される（註4）。すでに消滅してしまったが発見時の記録があり、箱式石棺を主体部とする径12.5mの円墳で、棺内には人骨が遺存し、四獣鏡や鹿角装鉄剣、銅釧などが出土したという。時期の判断に苦しむが、鏡の類例などから5世紀初頭ごろの時期が与えられている。のちの赤坂古墳群を形成する首長墓

写真5　中尾1号墳石室現況

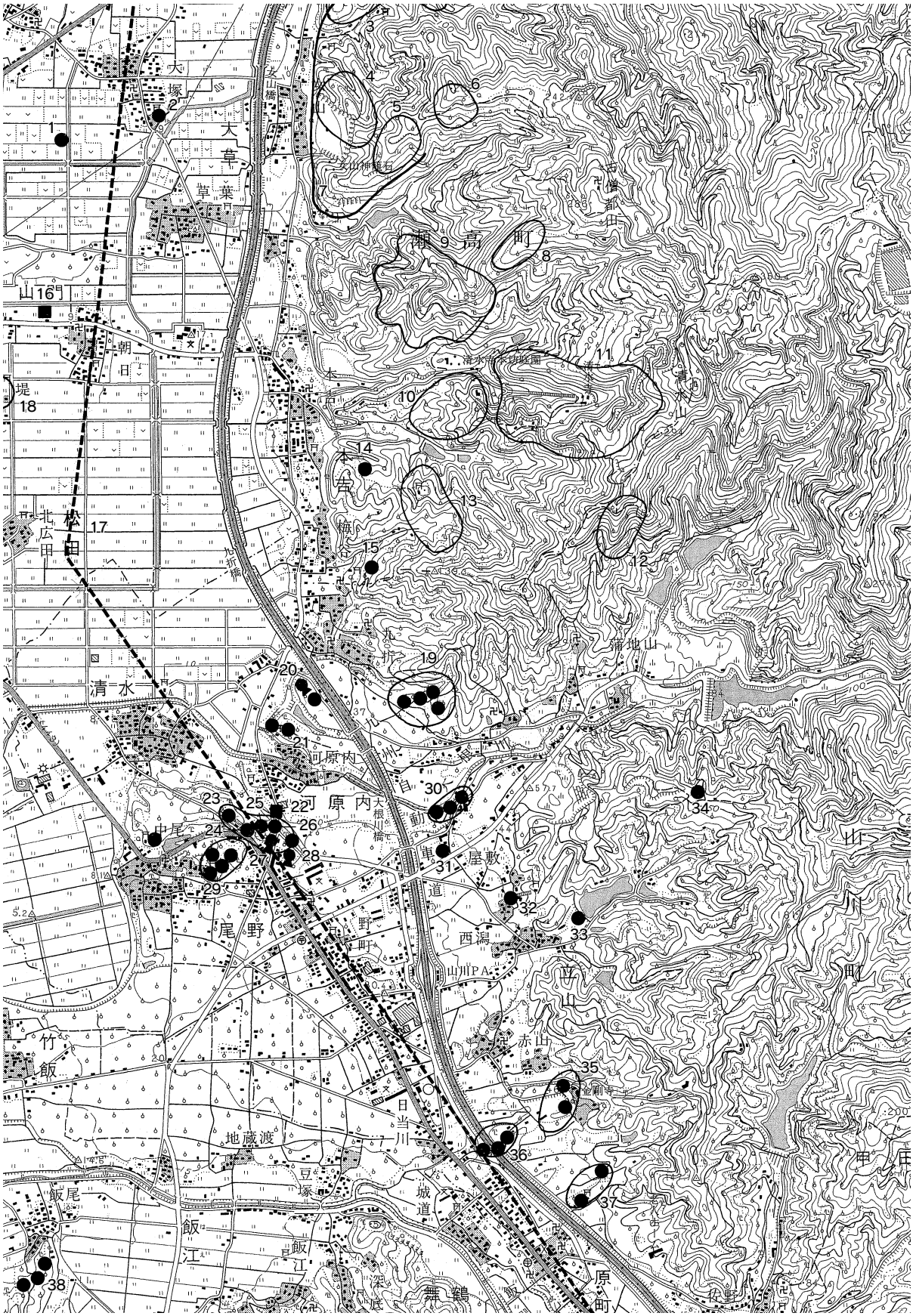
群に先行し、小規模ながら後の首長系列につながる小首長墳であったと理解したい。この面の上1号墳以後は若干空白期があり、5世紀末ごろになってクワンス塚古墳や赤坂1号墳が営まれる(註5)。クワンス塚古墳は帆立貝型前方後円墳と推定され、大根川流域では最初に営まれた前方後円墳である。時期的な位置づけからも、返済川流域の藤ノ尾車塚古墳から首長権が移動したものと考えられる。なお、赤坂1号墳とほぼ同時期かやや下るぐらいの時期に径約14mの赤坂2号墳も築造されている。

このように、古墳は中期になって次第に活発に造営されるが、これに対応する集落は先述のように中期前半までしか確認できない。首長系列が移動したことを考えると、旧山川町側で遺跡が発見される可能性もあるが、この点は将来の調査に委ねられる。

その後、古墳時代後期になると大根川流域に6世紀前半の九折大塚古墳（墳長約52m・前方後円墳)、6世紀中頃～後半の面の上2号墳（規模不明：単室横穴式石室）と首長墓の造営が連続する（註6)。したがって、山門郡における首長系列は大根川流域に落ち着いたようであるが、7世紀代の首長墳は不明である。ところで、旧瀬高町内では6世紀後半に成合寺谷1号墳が築造される（註7)。この古墳は、山門郡内では唯一の装飾古墳で、おそらく時期は離れるが藤ノ尾車塚古墳など5世紀代の返済川流域の首長墳に連なる小首長墳と考えられる。

さて、6世紀になると全国的に群集墳が増加するが、山門郡域でも同様の傾向が認められ、筑肥山地の西縁部を埋め尽くすほどに築造されている。ただし、発掘調査に至った事例は少ない。発掘された古墳群に山内古墳群があり、6世紀後半に築造された2基の円墳が確認されている（註8)。いずれも複室構造の横穴式石室を主体部とし、平面形態は胴張りプランをなす。また、詳細は不明であるが、筑肥山地前面に広がる沖積低地にも横穴式石室を主体部とすると推定される堤古墳群が存在する。ちなみに、赤坂古墳群からは離れるが山門郡の北東側（矢部川中流域）に位置する名木野古墳群では、6世紀中頃から後半にかけての円墳群が築造されている（註9)。基本的に単室構造の横穴式石室が採用され、3号墳のみ複室構造をなす。石室の平面形はやはり胴張りプランである。この古墳群では5世紀後半に遡る竪穴系横口式石室が1基築造されており、中期段階からの造墓を確認できる。これら後期古墳に後続する終末期古墳群の調査例はまだない。

古墳時代後期ごろからの集落動向をみると、中期中葉からの空白期が後期前半（6世紀前半）まで継続し、後期後半（6世紀後半）から再び活発な形成をみることができる。多くは7世紀の前半ごろまで続くようであるが、8・9世紀ごろまで断続的に遺構が確認されており、発掘調査が集落の一部を捉えたにすぎないことを考慮すれば、集落は概ね一定地域内で継続していたとみることが可能であろう。



1 権現塚古墳　2 蜘蛛塚古墳　3 日吉坊古墳群　4 長谷古墳群　5 山内古墳群　6 相撲場古墳群
7 女山神籠石　8 小中尾古墳群　9 獅子穴古墳群　10 清水谷古墳群　11 清水山古墳群　12 花岩谷古墳群
13 高塚古墳群　14 成合寺谷古墳　15 蛇谷古墳　16 御二田遺跡　17 西海道推定線　18 堤古墳群
19 九折古墳群　20 九折大塚古墳　21 宝満宮境内古墳　22 山ノ上遺跡第5次　23 赤坂5号墳　24 赤坂4号墳(面の上1号墳)
25 赤坂3号墳(面の上2号墳)　26 赤坂2号墳　**27 赤坂1号墳**　28 クワンス塚古墳　29 中尾古墳群　30 河原内古墳群
31 二本松古墳　32 二子塚古墳　33 立山古墳　34 黒ヶ谷古墳群　35 赤山古墳群　36 日当川古墳
37 原町古墳群　38 飯尾古墳群

第4図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

なお、首長墳の動向では上記のように返済川から大根川の流域に首長権が移動したとみているが、古代にはそれを裏付けるかのように「田前主帳」･「田前」などと記した刻書土器をはじめ越州窯系青磁、風字硯、製塩土器などが出土した山ノ上遺跡が、赤坂古墳群の北側の台地裾部に営まれている（註5)。とくに「主帳」は律令期の郡衙に勤務する書記官を示す職名で、山門郡衙に関わる地方官人の根拠地があったことが推定され、赤坂古墳群の被葬者像を考える上では重要な遺跡であろう。

また、郡衙との関連では、石帯や円面硯などが出土した御二田遺跡が山門郡衙候補地の一つに挙げられているが、女山神籠石や金栗遺跡（老司系瓦出土）・太神稲荷遺跡（円面硯出土）・権現塚南遺跡（「堺」墨書土器出土）など周辺の古代遺跡を含めた位置づけを総体的に考究する必要がある。

以上、山門郡を中心に古墳時代の集落と古墳の変遷を通覧してきた。調査例が限られるため大枠での変遷しか把握できなかったが、今後の調査進展を期待したい。

註

１．集落遺跡の様相については、下記文献でまとめられており、それを参考とした。個々の遺跡の参考文献については、これに記載されている。
福岡県教育委員会2007『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集

２．高田町教育委員会1992『辺良田古墳』高田町文化財調査報告書第2集

３．福岡県教育委員会1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ⅩⅣ

４．佐々木隆彦1995「山川町・面の上1号墳の再検討」『九州歴史資料館研究論集』20集 九州歴史資料館
山川町商工会1988「面の上古墳」『山川ゆずりは風土記』20

５．福岡県教育委員会2001『山ノ上遺跡・赤坂古墳群』福岡県文化財調査報告書第164集

６．山川町教育委員会1993『面の上2号墳』山川町文化財調査報告書第1集

７．瀬高町教育委員会2004『成合寺谷1号墳』瀬高町文化財調査報告書第17集

８．瀬高町教育委員会1982『女山・山内古墳群』瀬高町文化財調査報告書第2集

９．瀬高町教育委員会1977『名木野古墳群』瀬高町文化財調査報告書第1集

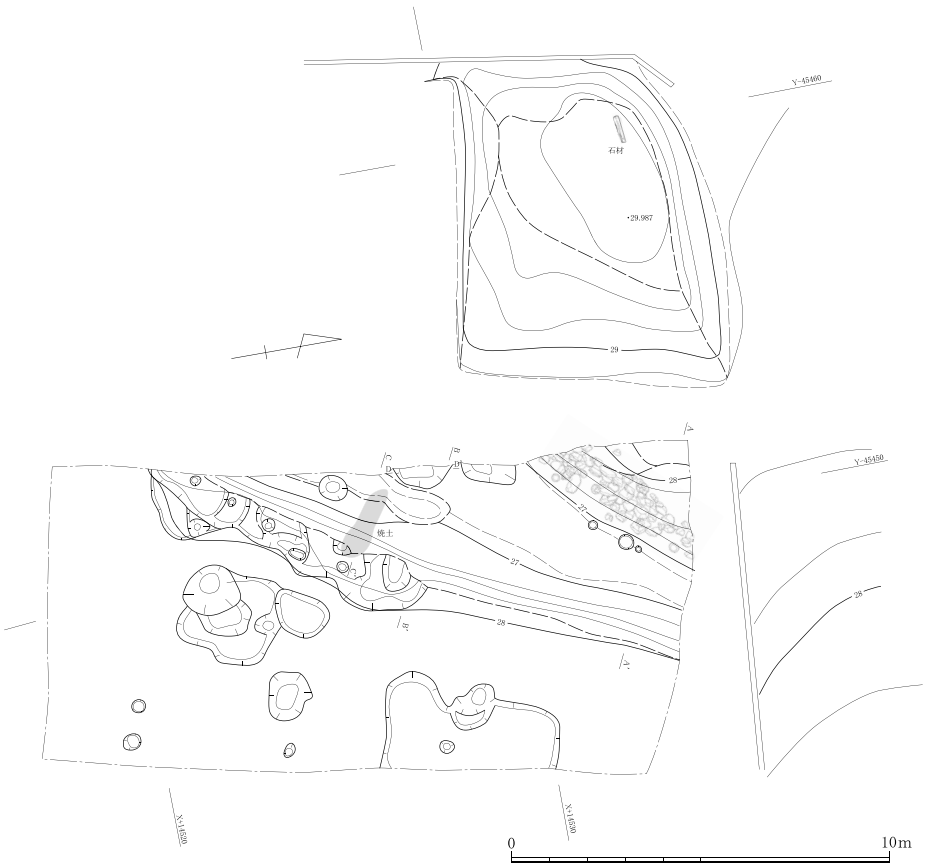
Ⅲ　発掘調査の記録

発掘調査対象面積は第2次調査が約154㎡、第3次調査が約10㎡である。なお、調査対象地と第1次調査地との間は道路となっており調査対象とすることができなかった。発掘調査は2次にわたって実施したが、報告は一括して記述することとする。

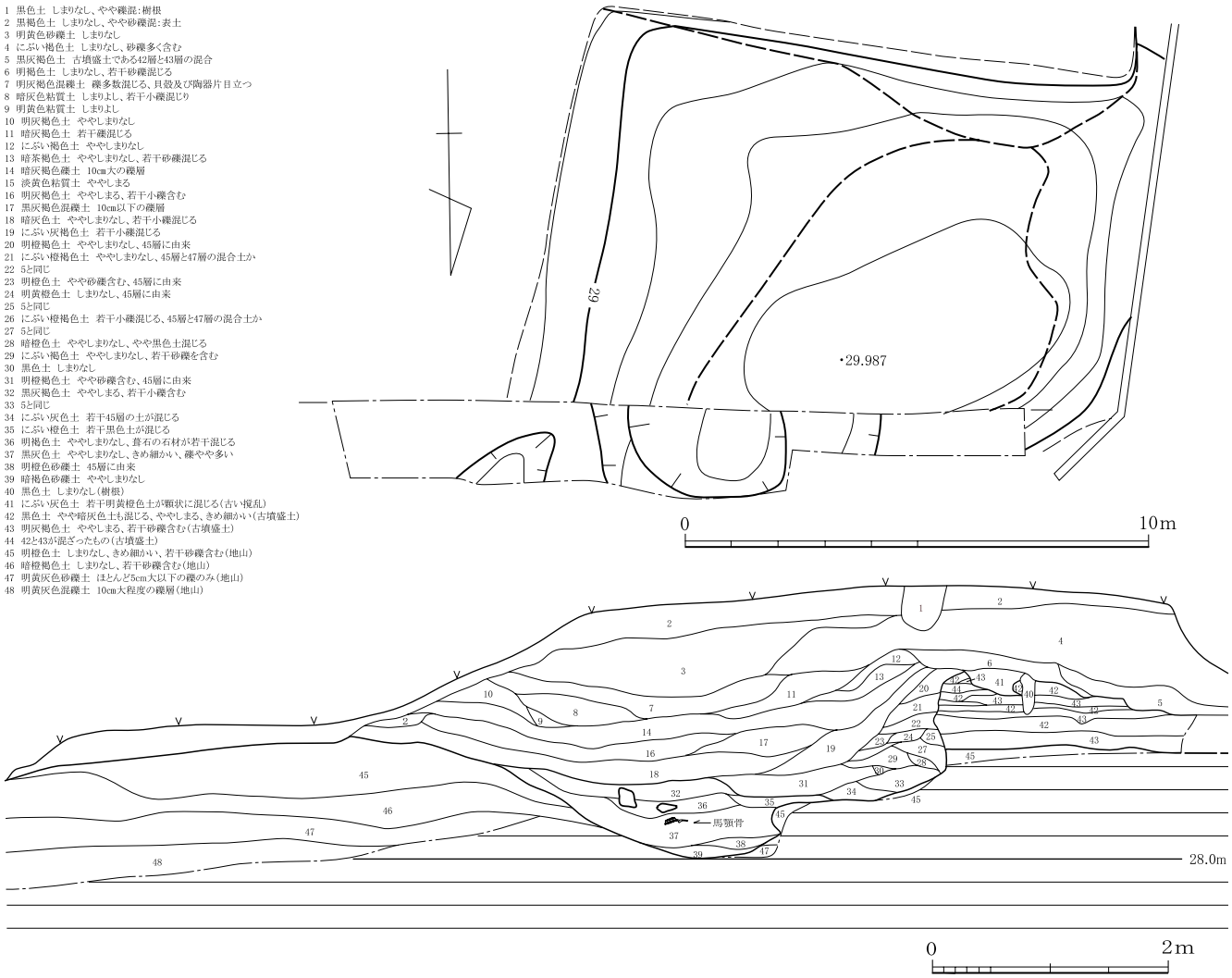
1　墳丘

個人宅の庭先に残存していた古墳の墳丘は、9m×7mの方形をなし、高さは1m強を測るものであった（第5図）。全面に大小の礫が散布している状況であったが、後の断面観察からもわかるとおり近世の撹乱に伴うものであり、かなり積み直された塚であると想定される。

頂部からややずれた位置に板石が立てられており、調査開始時には花がいけられて信仰の対象となっていた（写真2）。板石は幅約80㎝を測り、盃状の窪みがある。おそらく石室石材の一部かと考えられる。なお、この板石は今回の道路工事により転落する危険があるとのことで、残丘中心近くに移設した。なお地権者の話から、かつては畳大の大きな板石があったが、置いておいたら持ち去られたとのことであった。



第5図　第2次調査遺構配置図・墳丘測量図（1/200）

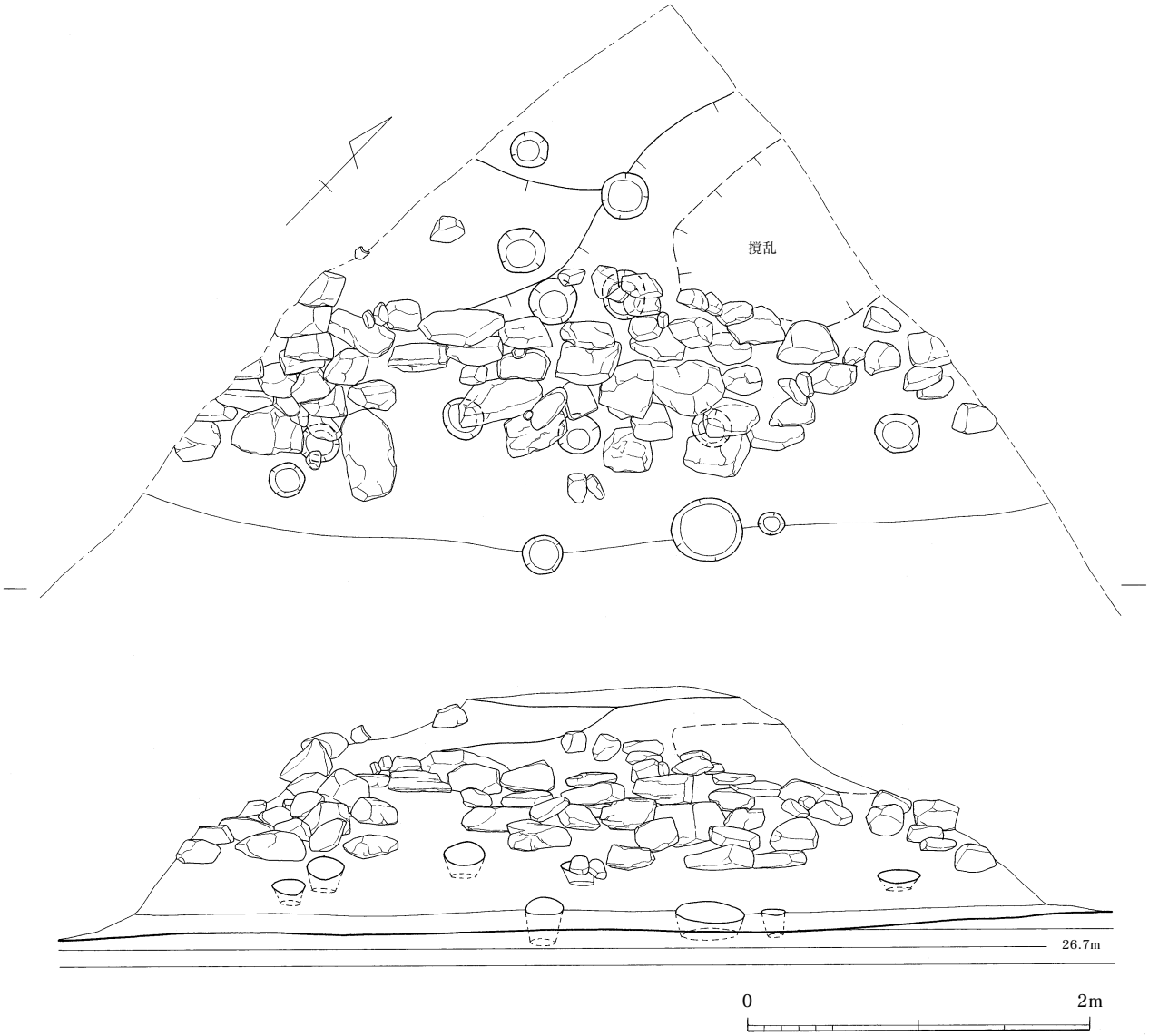


第6図　第3次調査遺構配置図（1/150）、墳丘土層図（1/60）

墳丘の調査は、第2次調査時に測量調査を、第3次調査時に掘削部分の断面観察を実施した。墳丘は個人所有地であり、地権者との現地立会を経て測量・調査の承諾を得た。墳丘を清掃したところ、若干の埴輪片を表面採取した（第9図）。

墳丘の構築状況については、第3次調査で情報を得ることができた（第6図）。調査は擁壁構築により削平を受ける部分のみの調査であったために、墳丘斜面を真っ直ぐに整えて観察する程度のものとなった。大半は撹乱を受けており、地山のレベルよりも1m程度大きく下がる箇所もある。撹乱中にはある程度大きな角礫が含まれており、石室の痕跡がある可能性も考えたが、確証は得られなかった。撹乱は大きく二段階に分かれており、上層には肥前陶磁を多く含むことから近世に大きく改変されていると判断された。下層には陶磁器は含まれず、馬の歯や骨がまとまって出土し、それに供献されたかとみられる土師器皿がまとまって出土した（第18図）。

大きく撹乱を受けているものの、本来の盛土も長さ約2m、高さ約60㎝にわたって検出された。明灰褐色土と黒色土、およびそれらが混ざった土を10㎝前後の厚みで互層につき固めて版築をなしている（図版4－2・3）。

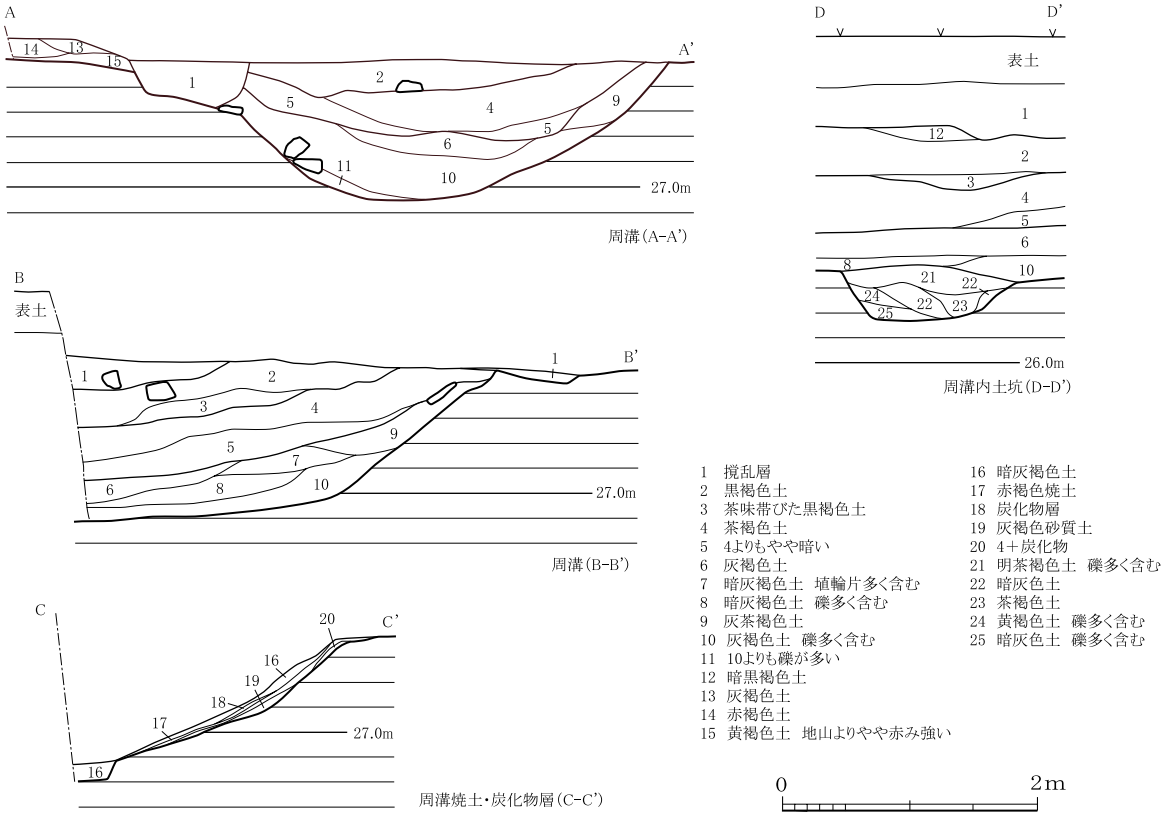


第7図　葺石検出状況実測図（1/40）

墳丘裾部分に関しては、第2次調査により状況が明らかとなった。第2次調査区内での墳丘は調査区北西を中心として一辺4mの直角二等辺三角形状に残存が確認された（第7図）。上部は削平をうけるが、周溝堆積内は葺石の残存が良く、人頭大の角礫を積んでいる。周溝底面の下端からは積まれておらず、約20㎝上位から積み始めている。

調査最終段階で葺石を除去して下面の遺構および墳丘の堆積を確認した。葺石の下面にはその裾部にて約40㎝間隔で小ピットが検出された。ピットの深さは約10㎝で浅い。葺石がずれた可能性もあるが、葺石下にピットが存在することから葺石を葺く前に設けられたものと考えられ、葺石設置の目印的なものであったのであろうか。

葺石は地山面に葺かれており、調査区内で検出された墳丘は地山を削り出して成形されている状況が確認された。調査区北西隅ではわずかに赤褐色土の堆積があり、墳丘の版築盛土の可能性が考えられる。



第8図　周溝土層断面図（1/60）

2　周溝

第2次調査の調査区は約9m×16mの長方形であるが、遺構検出の結果、ちょうど斜めに直線的に周溝が検出された。周溝以外は小ピットと不整形の落ち込みが確認された。このピットと落ち込みは掘削の結果近世に属するものであることがわかった。

周溝の南半分は上層に近世の落ち込みおよび撹乱が重複しており、本来のラインは当初検出できなかった。それらを除去すると直線的に周溝が走ることが確認された。撹乱除去後に約50cm間隔でピットが並ぶのが確認されたが、遺物は出土せず、撹乱に伴うものとも古墳に伴うものとも判断は難しい。

周溝検出面にて炭化物及び焼土を多く含む地点を確認し、当初は撹乱に伴うものと判断していたが、周溝を掘削した結果、周溝の堆積下に続くことが確認され（第8図、C－C’断面）、古墳祭祀に伴うものと判断された。炭化物・焼土の集中する範囲は幅約30㎝で、周溝の床面から肩に至るまで細長く延びている。焼土の堆積は2～4㎝を測り、かなり長期の被熱の結果と思われる。

土層観察用のベルトを設定し、周溝の掘削を開始した。最上層は黒褐色土の堆積が30～40㎝程度あり、それを除去すると茶褐色土が検出された。この茶褐色土の検出面で比較的多くの大形角礫が散乱した状況で検出された（図版5-1）が、葺石が転落してきたものと考えられる。黒褐色土には8世紀を中心とする土器が少量であるが出土しており（第10図）、当該時期に墳丘がある程度破壊されたのではないかと判断された。

さらに茶褐色を呈する周溝埋土の掘削を継続した。この層は中央付近で約50cmの堆積が

あったが、遺物の出土は比較的少ない。

茶褐色土の下層には灰褐色土を基調とする堆積が約40㎝存在した。この堆積の下半は礫を多く含み遺物をあまり含まないが、上半には多数の遺物が含まれていた。遺物は大半が円筒埴輪であったが、形象埴輪や須恵器器台も含まれる。ただし、本来置かれていたという状況ではなく、かつ同一個体が割れた状態で横転している様相でもなかった。しかし、整理作業を経てみると3個体の円筒埴輪が完形に復元できたこと、かつ上層には新しい時期の遺物を含まない厚い堆積が存在することを考慮すると、この堆積にある埴輪は比較的早い段階にバラバラに割られた状態で廃棄されたと想定される。

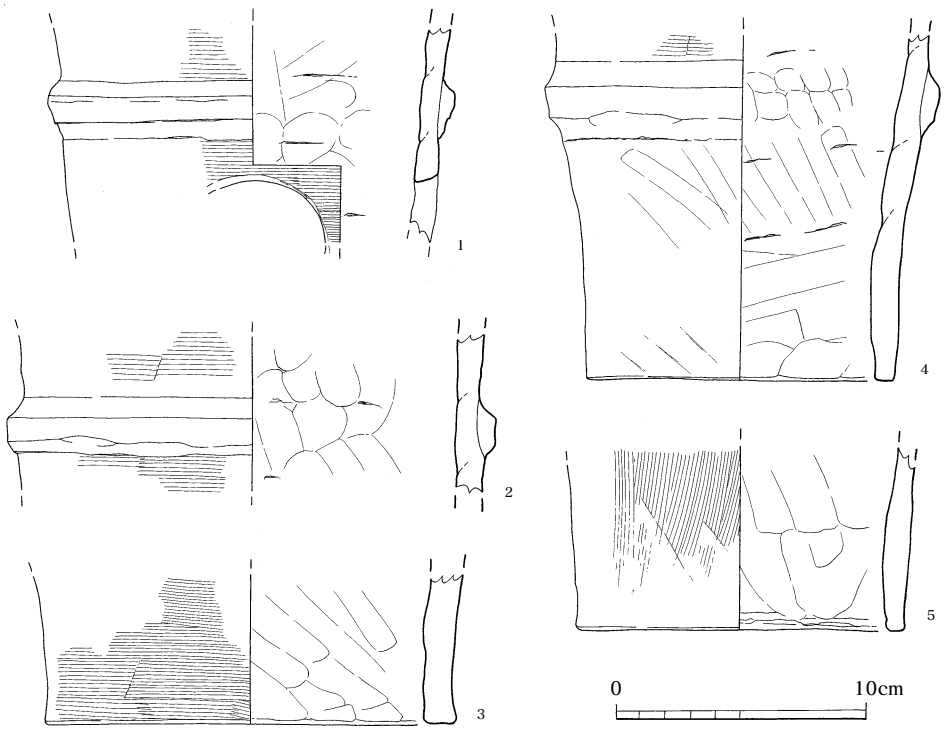
周溝の底面にて小土坑を2基検出したが、調査区外へ延びることもあり詳細は不明である(第8図、D-D’断面)。遺物は円筒埴輪小片が少量出土したが、上層からの混入の可能性も考えられる。

周溝は検出面から底面まで約120㎝を測るものであった。

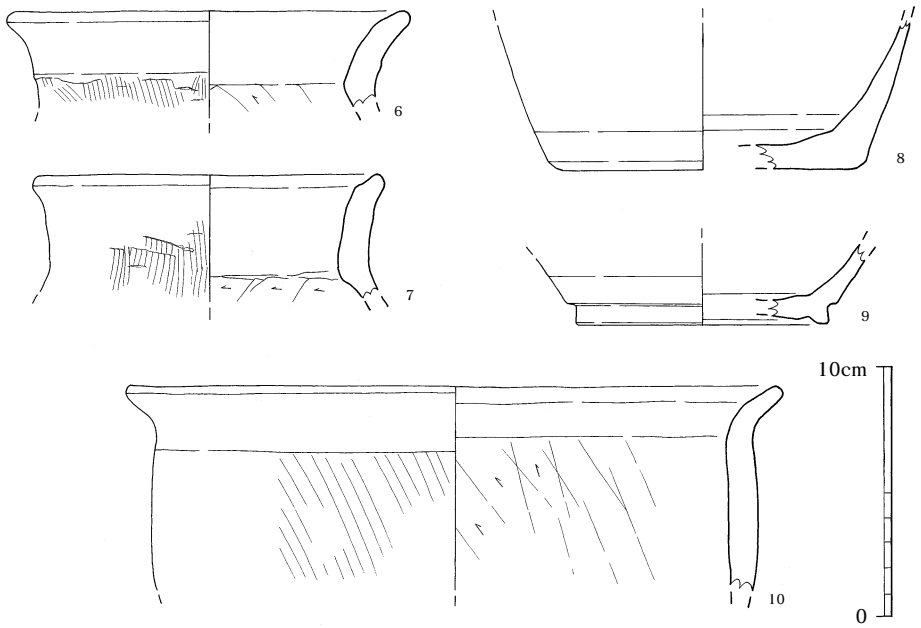
3　出土遺物

墳丘表面採取遺物（第9図）

第9図は墳丘にて採取した円筒埴輪である。1～4は外面調整にヨコハケを有する。ヨコハケを有する資料は周溝出土円筒埴輪には朝顔形埴輪にみられるのみであるのに対して、墳丘採取資料には含まれる比率が高い。墳丘土層図にもある撹乱の埋土に含まれるものと判断され、後述する周溝出土埴輪とは特徴が異なることからも混入の可能性を考慮する必要があろう。3は底部片であるが、基底部にまでヨコハケが確認され、底部調整は認められない。4の基底部には板状工具による底部調整が施され、工具の圧痕を残している。5は底部調整を有する基底部片であり、周溝出土埴輪と共通する特徴を有する。



第9図　墳丘表面採取遺物実測図（1/3）



第10図　周溝上層出土遺物実測図（1/3）

周溝上層出土遺物（第10図）

第10図は周溝上層の黒色土・茶褐色土からの出土資料。転落している葺石を含む面及びその上層からの出土資料である。埴輪片も出土しているが、古墳時代以降に属する遺物を示している。6・7・10は円弧を描きながら屈曲する口縁部を有する甕片。胴部外面はハケメ、胴部内面はケズリによる調整である。8は瓶の底部であろうか。厚手であり、外面は丁寧な回転ヘラケズリにより平滑に仕上げられる。9は高台を有する杯の底部。高台の断面形は低い台形である。8・9とも器種としては須恵器に属するものであるが、酸化炎焼成により色調は赤褐色を呈する。第10図に示した遺物は8世紀に位置付けられるものであり、すなわち当該期に墳丘がある程度破壊を受けたことを物語っている。

周溝出土埴輪（第11～13・15・16図）

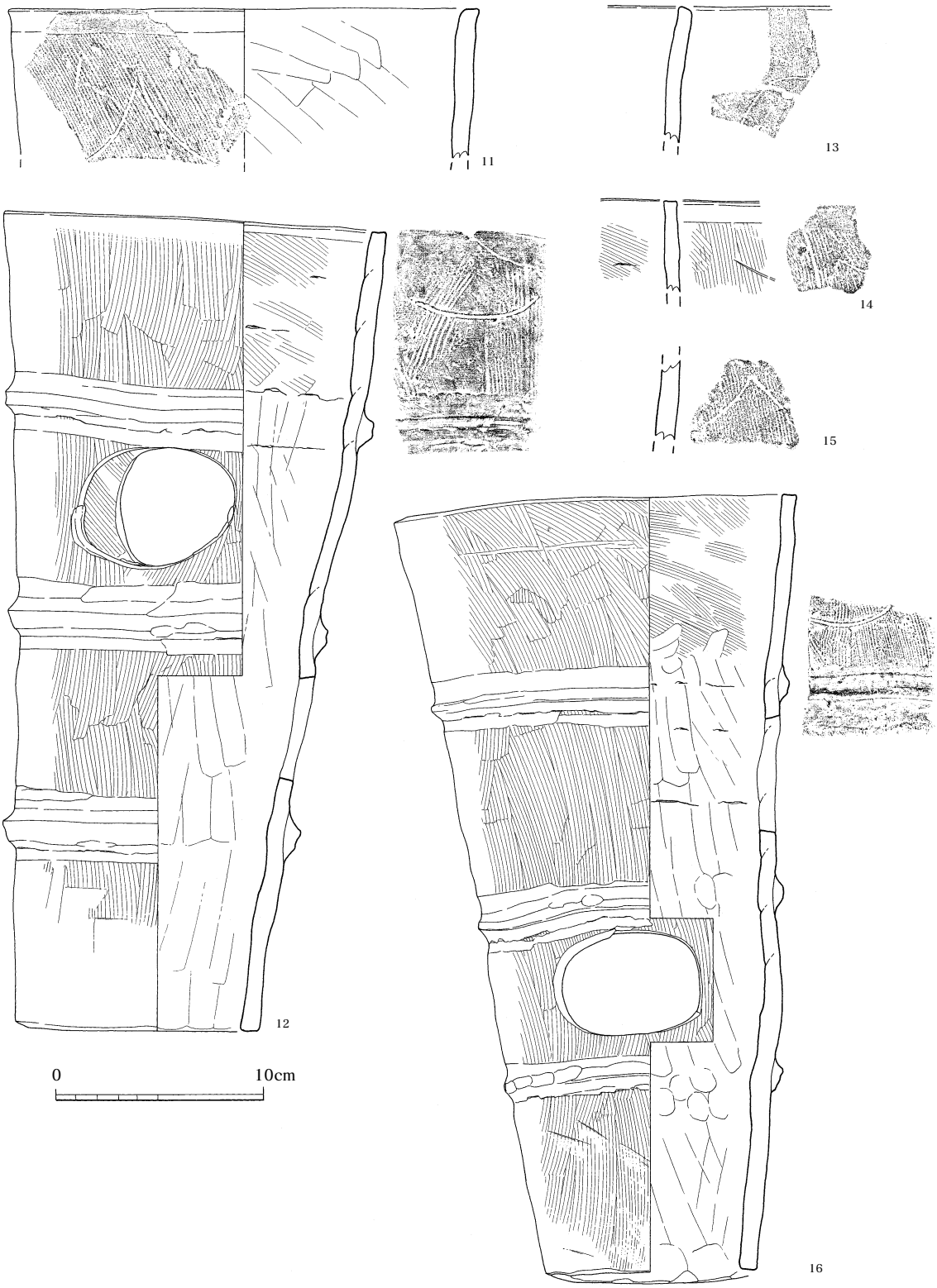
第11～13図は周溝から出土した円筒埴輪。細部をみれば差異は随所にあるものの埴輪工人の差が反映されたものと見るべき点が多く、全体的には共通項が多い。

今回の調査では完形に復元できた資料が3点あり、良好な資料が得られたと評価できる。これらからみて、17はやや全体的に大きい傾向にあるが、突帯が3条めぐり、器高40㎝、底径10㎝、口径18㎝前後をなすものといえる。福岡県内の資料を見渡したところ、非常に小さい部類に属するものといえる。

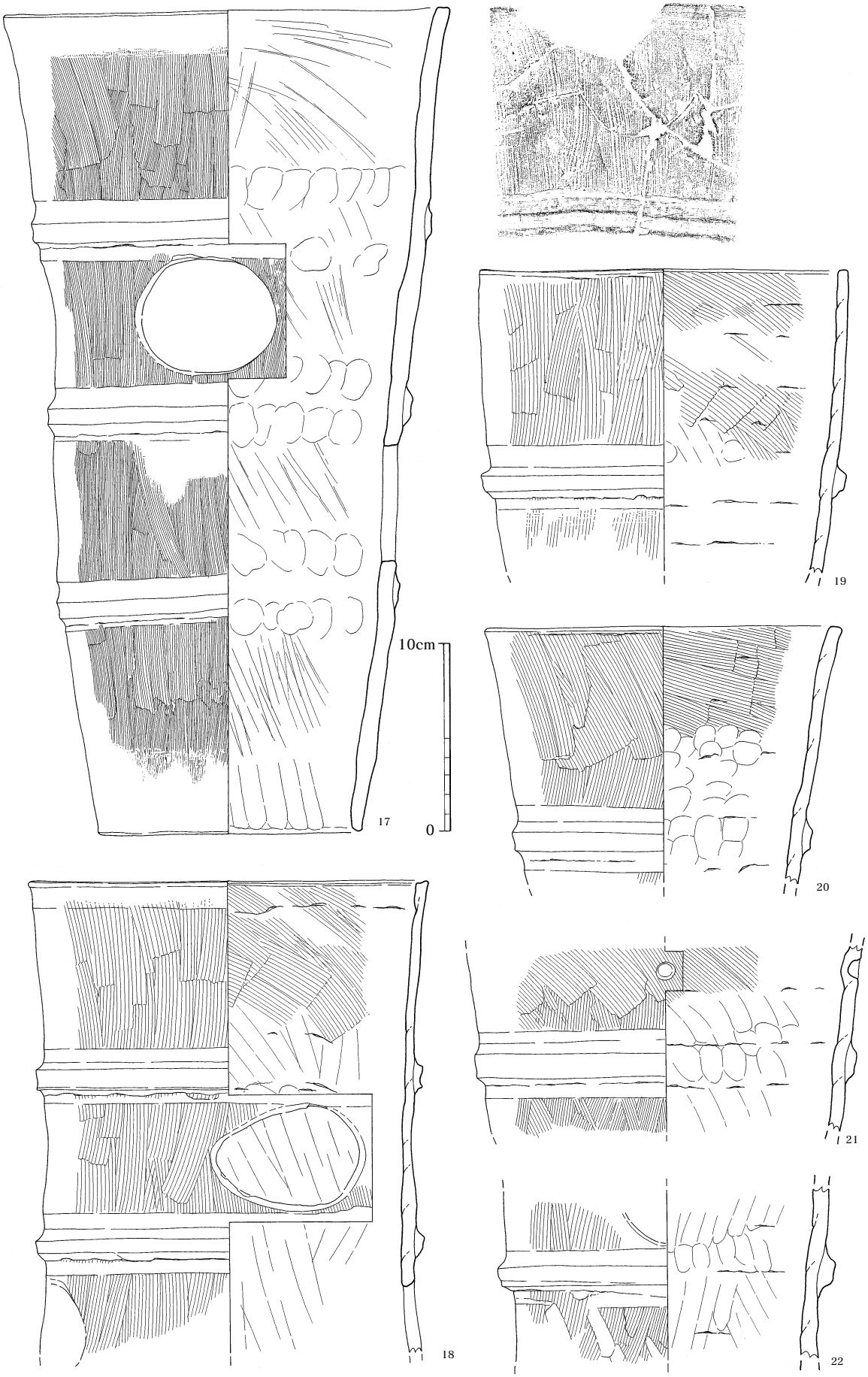
口縁部は外反することなく直線的に立ち上がるもしくはわずかに口径が大きくなる程度のものが大半を占める。その結果、全体的なプロポーションもまた真直ぐ立ち上がる、もしくは直線的に広がる器形となる。

透孔は円形で、径は5㎝程度を測る。径が大きくない円筒埴輪であることも影響するが、透孔は大きく開けられている印象が強い。透孔は上から二段目及び三段目に一段に二孔ずつ直行する方向に設けられる。

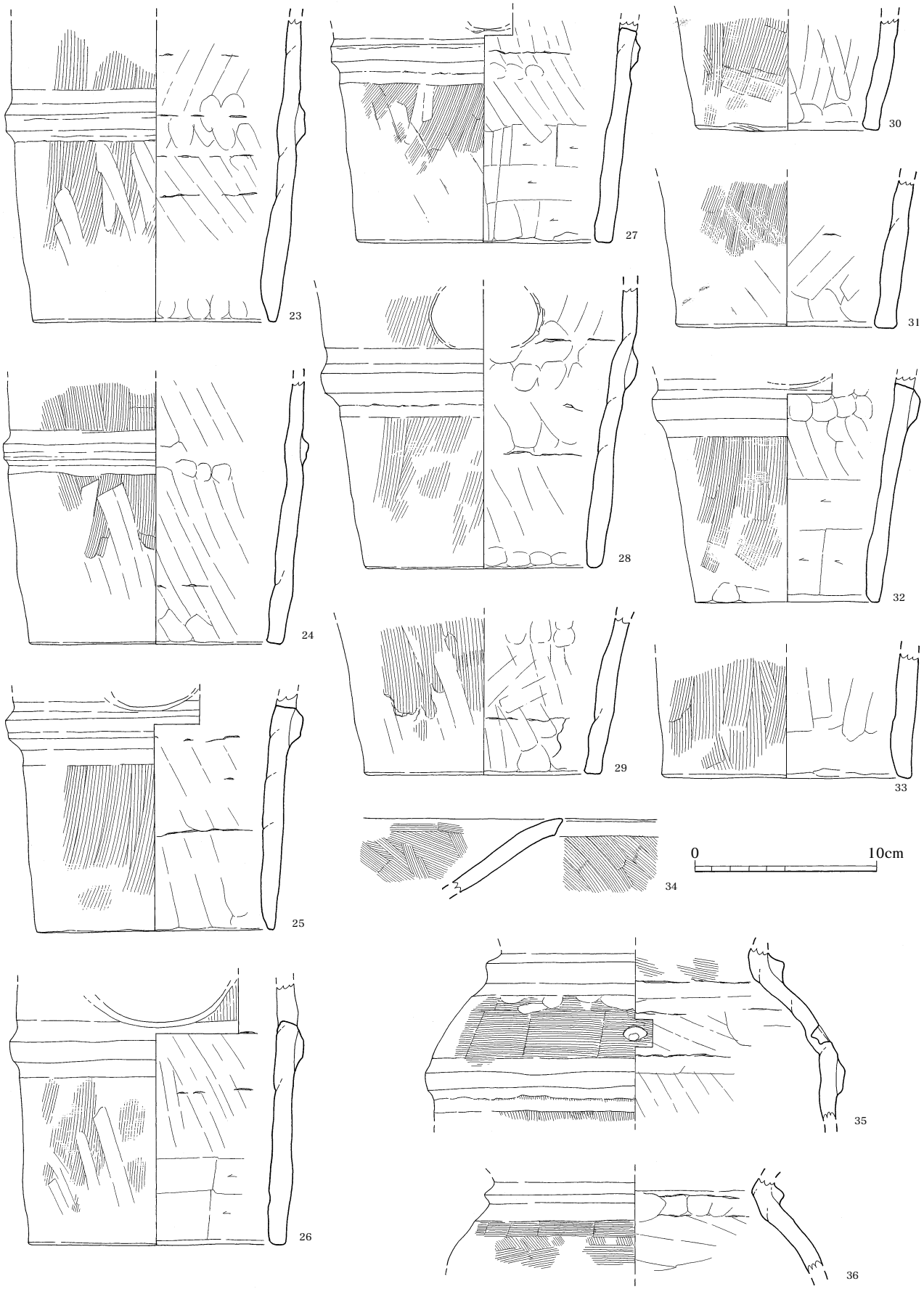
突帯は断面台形のものが多くを占めるが、断面三角形につぶれたようなものもある。突出は低く、突帯の高さは5㎜前後のものが多い。断続ナデ技法や押圧技法は確認されない。



第11図　周溝出土遺物実測図①（1/3）



第12図　周溝出土遺物実測図②（1/3）



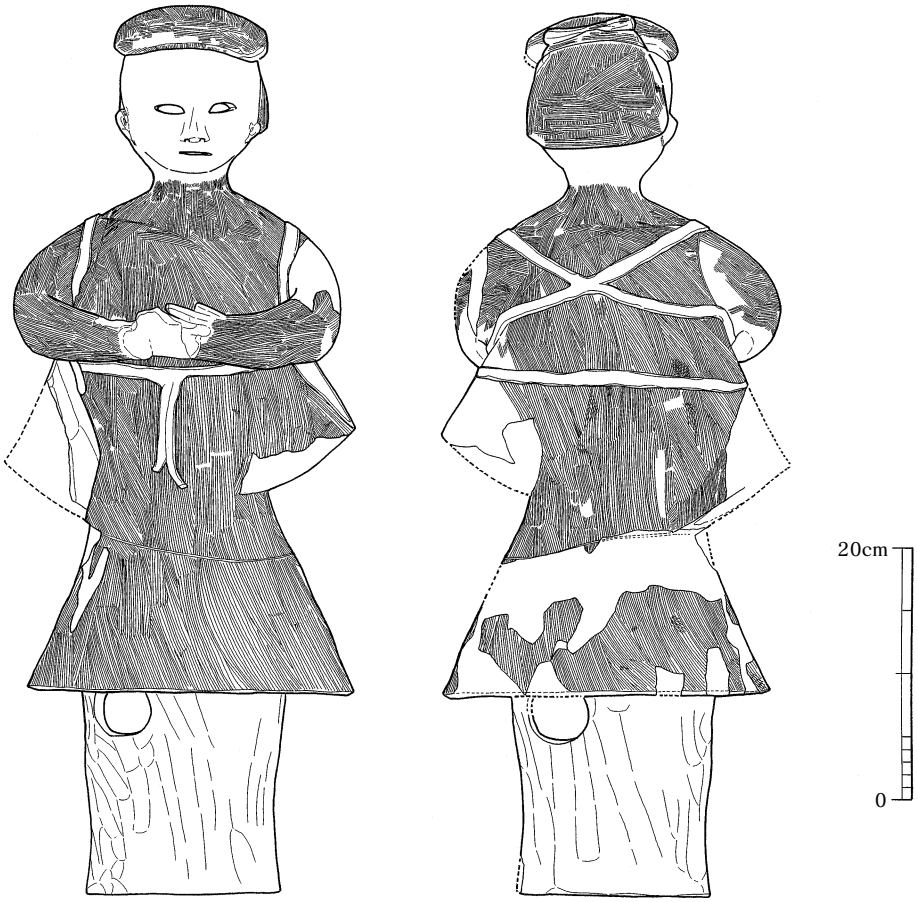
第13図　周溝出土遺物実測図③（1/3）

焼成は良好で堅緻なものと、甘く器壁が摩滅するものの二者がある。前者の色調は茶褐色を呈するものが多く、灰味の強い半須恵質と呼べる資料もある。後者は淡黄褐色を呈するものである。両者ともに黒斑は認められない。

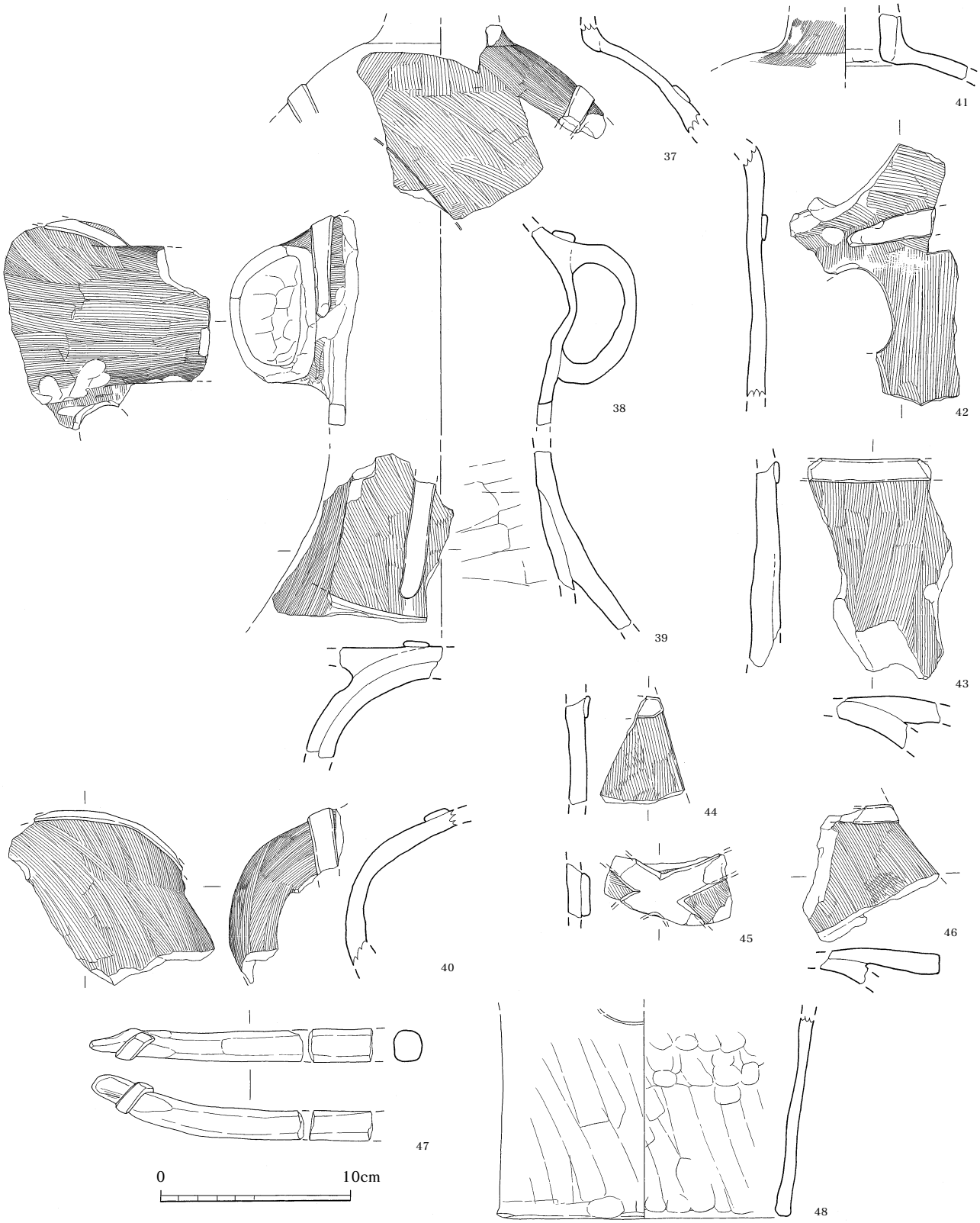
器面調整は外面はハケメにより、内面はナデが基本であるが口縁部近くはヨコハケを施すものがある。外面のハケメ調整はタテハケもしくはナナメハケであり、口縁部はナナメハケを多用する傾向にある。ヨコハケは円筒埴輪には確認されず、朝顔形埴輪の肩部にみられるのみである。これら朝顔形埴輪は肩部より下に関しては資料が得られておらず、器種によって調整が変わっているのかどうかは確認し得なかった。ハケメの原体には粗いものと細かいものの大きく分けて二者存在する。内面のナデ調整は指により縦もしくは斜め方向に施すもので、凹凸が多く観察される。突帯にあたる部分の内面には指による圧痕が普遍的に観察される。

基底部に底部調整を施す点が、この古墳出土の円筒埴輪を大きく特徴付けている。すなわち、自重で歪んだ円筒埴輪の基底部を整形するためか、基底部外面ケズリ調整もしくは板状の圧痕が残り、それに対応してハケメ調整が消されているというものである。また、基底部内面の端部をケズリ調整するものもあり、底部調整とみなすことができよう。この内面のケズリは幅広い範囲を横方向に削るものである。

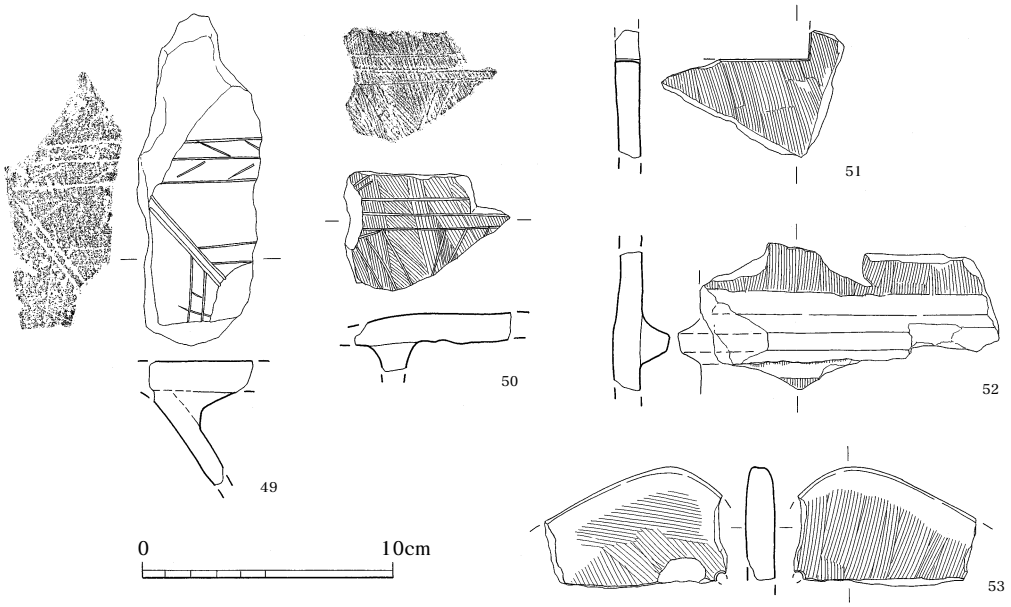
34から36は朝顔形埴輪。口縁部の資料は少なく、34に大きく開く口縁端部がある程度で、擬口縁部の資料は確認し得なかった。35・36はドーム状を呈する肩部で、高さはなく強く内



第14図　小正西古墳の人物埴輪（1/6）



第15図　周溝出土遺物実測図④（1/3）



第16図　周溝出土遺物実測図⑤（1/3）

湾する。外面には静止痕を残すヨコハケを丁寧に施す。頸部には断面三角形の突帯を巡らせている。

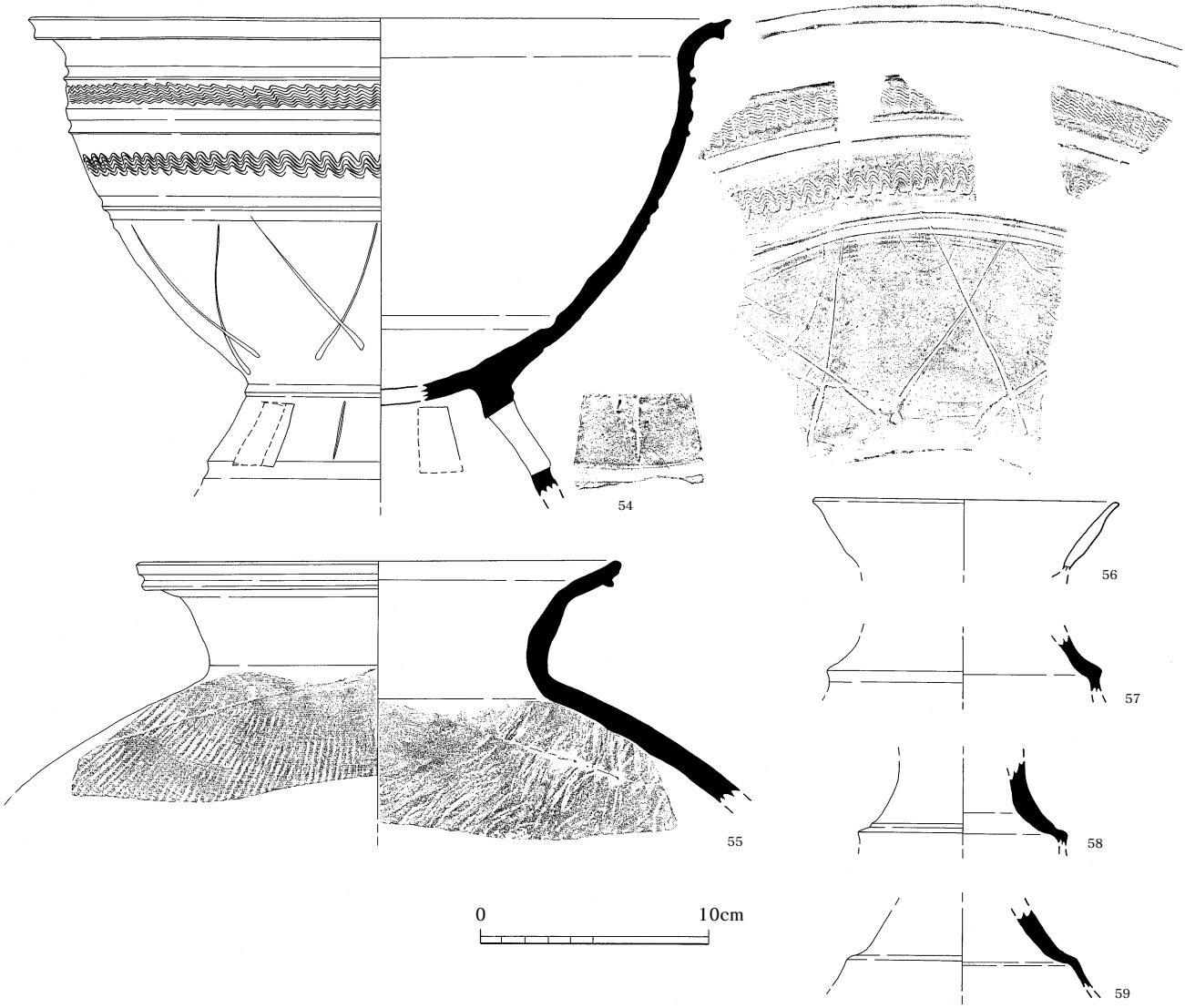
ヘラ記号を有する円筒埴輪はある程度の量認められる。破片では詳細は知りえないが、何れの資料も最上段に施されるようである。ヘラ記号の種類は多様であるが、ごく細い沈線でいれるものと、太い沈線で簡潔にいれるものの二者がある。また断面円形の棒状工具で刺突したヘラ記号状のものも確認される（21・35）。刺突した際に内側へ大きく器壁が突き出した形となるが、穴は貫通していない。

第15・16図は形象埴輪。形象埴輪には巫女をかたどった人物埴輪や家形埴輪・盾形埴輪があるが、細片となっており、全体の様相が掴みにくい。円筒埴輪でみられたように、焼成について硬質のものと軟質のものとがある。

37～46は人物埴輪。これらの資料は断片的なもので、本来の部位を検討するのも困難であるが、今回出土した埴輪と類似度が非常に高い資料が福岡県飯塚市穂波町小正西古墳で出土している。第14図にそれを掲載しているので、今回の出土資料の理解の助けとなることを期待したい。この類似する資料から考えて、人物埴輪は巫女を表現したものと考えられるが、腕の破片等接合しない資料が比較的多くあり、数個体分出土していると判断され、全てが巫女であるとは断言できない。なお、衣服の表現のある資料は多く出土しているが、顔の表現のある資料は皆無であり、わずかに髷の一部とみられるのが含まれるのみであった。

37・38・40・42は腕の表現を伴う。何れも腕を前方に上げる動作を示しているといえよう。腕は全て中空であり、胴部とは穿孔を介して接合される。衣服の表現があり、突帯を貼り付けて襷としている。43～46にも襷の表現があり、44・46には衣服の端部がみえる。45は背中で襷がクロスする表現である。衣服は胴部下半からスカート状にひろがるものであり、円筒形の胴部に衣服を貼り付けた造形となっている。

腕の付根の下部、わきの部分には穿孔が設けられている。



第17図　周溝出土遺物実測図⑥（1/3）

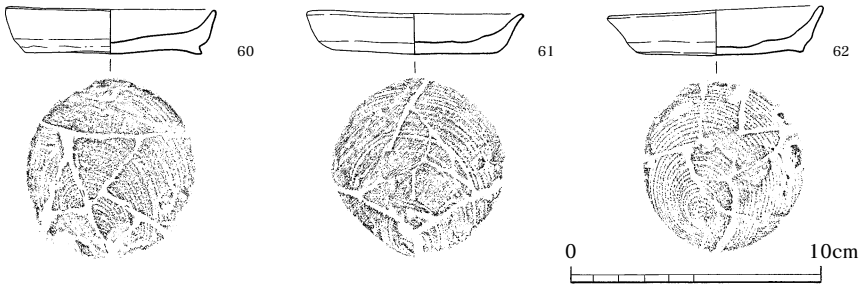
47は大刀の表現か。棒状の粘土の一端に細い粘土紐を巻きつけている。内側は別個体に付着していたかのような平坦部があり、人物埴輪の腰に貼り付けらてあったのではないかと考えられる。

48は円筒埴輪状の基底部であるが、全体が斜め方向のナデによる調整であることや、基底部に透孔が存在することから人物埴輪の基底部と考えられる。

49・50は盾形埴輪。盾を模した面の裏側には円筒埴輪等別個体が接合するものとみられるが、50は接合する角度から箱形の別個体につながるものとみられる。直線を組み合わせて文様を構成するが、小片であるために文様の全形は知りえない。49は細線によって文様を表現するが、50は強いタッチにより描く。

51・52は家形埴輪。51は平坦な板状をなし、方形の穴をあけるもの。窓の表現であろうか。52は壁下端部近くの突帯。突帯は高くシャープなつくりで、高さ約1㎝を測る。破片の左隅付近で屈曲しており、家形埴輪の角の部分と判断される。

53は平坦で縁が円弧を描く破片。平坦な両面ともに丁寧にハケメ調整されることから、両



第18図　馬埋葬土壙出土土器実測図（1/3）

面ともに表に面していた部位と思われる。小穿孔があけられていたようであるが、ごく部分的であり詳細は不明。形状から馬のたてがみの可能性がある。なお、他に馬形埴輪とみられる破片資料は出土していない。

周溝出土須恵器（第17図）

54は器台で、脚部は大部分が欠損する。周溝の下層からかなりばらついた状態で出土した。口径30.2㎝、鉢部深さ14.5㎝を測り、深い鉢部ということができる。口縁部は強く外反し、端部はシャープに尖り、直下に断面三角形の突帯を巡らせる。鉢部外面には3条の断面三角形の突帯を巡らせ、二段の波状文による文様帯をつくる。突帯は上面には丸みを有するが高さのあるシャープなものである。ただし上から3条目の突帯は上面がつぶれたような形状になる傾向にある。鉢部下半の外面にはヘラ描きの「×」印が連続する。この文様は下から上に向かって時計回りに施される。鉢部の調整はタタキのち回転ヨコナデであり、外面には部分的にタタキ痕が残されている。内面にはあて具痕とみられる凹凸が観察できるが、青海波は認められない。鉢部と脚部との接合面には接合をよくするための「×」印の刻みを有する。鉢部と脚部との境界には突帯をめぐらせるが、低くシャープさはない。脚部には長方形の透孔が一段当たり5個あけられる。透孔と透孔の間には刀子状の工具で縦方向に切込をいれる。切込は一条と思われるが、一箇所には長短二条の切込がある。

55は大甕の口縁部。口縁部直下には断面が丸みを帯びた三角形をなす突帯を巡らせる。胴部はタタキにより成形され、外面には平行タタキ、内面には青海波あて具痕を残すが部分的にナデにより消されている。大甕はこの他にも実測に耐えない胴部片が多く出土している。いずれもタタキによる成形で外面には平行タタキ痕、内面には青海波あて具痕を残すもので、半すり消し状をなすものもある。

56は灰色を呈するが、軟質であり、瓦質ともいえる資料。薄手であり大きく開く杯の形状をなす。

57～58は高杯の脚部小片。ラッパ状に開き、屈曲を経て端部に続くものとみられる。おそらく短脚になるであろう。天地を逆として 瑤 の頸部となる可能性もある。

馬埋葬土壙出土土器（第18図）

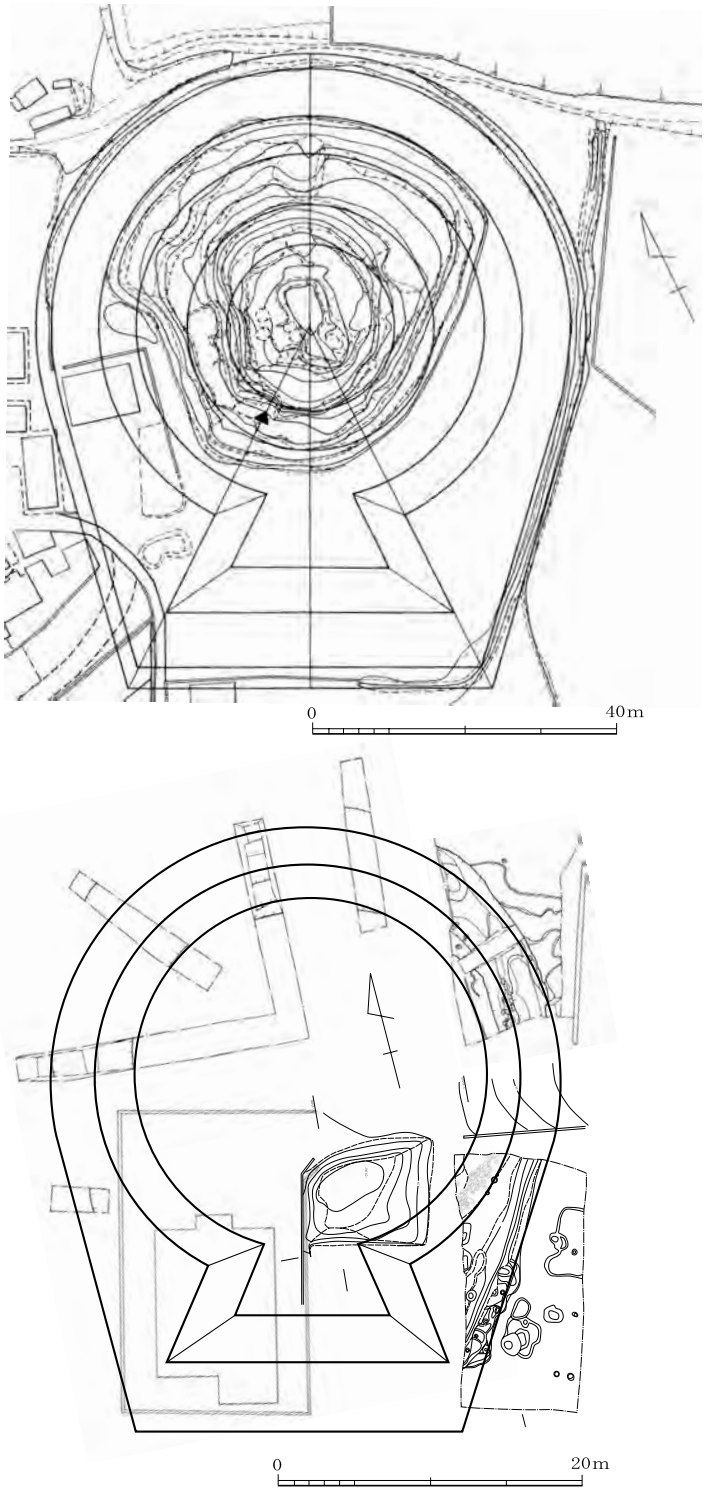
第3次調査の墳丘調査時に検出された土壙から馬の骨等とともに出土した遺物を第18図に掲載する。土師器皿であり、底面には糸切り痕を残す。口径はいずれも8.6㎝程度を測る。おそらく馬を埋葬する際に供献されたものであろう。おおむね14世紀頃に位置付けられるが、赤坂1号墳がこの頃に大きく掘り込まれ、馬の墓として利用されたことを物語るものである。

Ⅳ　まとめ

1　墳丘について

今回の発掘調査によって赤坂1号墳の周溝および墳丘裾の形状が確認された。第1次調査によって確認された周溝・墳丘裾に続くものであり、墳丘復元がより具体的に可能となったといえる。特に、周溝が直線的に延びることが確認された点は特筆される。すなわち、墳丘の円弧に沿うものではなく、直線的にひろがるということは、盾形の周溝、すなわち前方部の存在を想定させるものである。第1次調査と第2次調査の成果を合成させると墳丘裾および周溝のラインともにほぼ自然に巡り、第19図のように本来の形状が復元できる。ここで、隣接するクワンス塚古墳の墳丘と比較すると、後円部の径がほぼ半分であることが判明し、それにあわせて周溝の形状を縮小して比較すると、ほぼ重なることが判る。このことから、赤坂1号墳の墳丘はクワンス塚古墳の規模・規格を1/2にしたものであると想定できる。

クワンス塚古墳は周溝まで含めた全長は84m、後円部径56mと想定されており、赤坂1号墳がクワンス塚古墳の規格の1/2と考えてよいならば、周溝まで含めた全長42m、後円部径28mの前方後円墳ということができる。



第19図　赤坂1号墳とクワンス塚古墳の墳丘比較
上：クワンス塚古墳（1/1000）
下：赤坂1号墳（1/500）

2　出土遺物について

調査区が限られた面積であったにもかかわらず、周溝からは比較的多くの埴輪の出土があった。第1次調査でも得られた資料は多い

が、今回完形に復元できる資料が得られた点でそれを大きく補完できるものとして評価できる。

また第1次調査では形象埴輪は出土しなかったが、今回は破片ではあるものの多くの資料が得られた。特に精美な人物埴輪は特筆される。福岡県内での類例は飯塚市小正西古墳出土資料にあり、福岡県指定文化財（考古資料）となっている。この埴輪は大阪府藤井寺市蕃上山古墳等に類例がみられ、その工人の関与を考えたことがあるが、今回の出土はそれを裏付けるものとして注目できる。すなわち、今回出土し円筒埴輪には北部九州では稀にしか確認されない底部調整を伴うものであり、小正西古墳出土埴輪にも共通するといえる。円筒埴輪に底部調整を有し、精美な形象埴輪を伴う事例としては他に筑紫郡那珂川町貝徳寺古墳があるが、小正西古墳・貝徳寺古墳・赤坂1号墳とも地域的には全く別地域に分布するものであり、埴輪工人の動き・地域首長間の関係がいかなるものであったか、問題を提起するものといえよう。

3　古墳築造の時期について

古墳の築造時期については第1次調査の報告の際にも検討されており、その中で出土須恵器から陶邑古窯跡群のTK23～TK47型式段階に類し、5世紀末から6世紀初頭の年代観が与えられている。今回出土した資料からでは、須恵器器台がより古い特徴を有すると思われる。器台は鉢部の形状や脚部の切込などから、朝倉古窯跡群で焼成されたと考えられる。「×」印のヘラ描き文様の類例は管見に触れないが、八並古窯跡出土資料に類例として挙げられるかもしれない。こうした諸特徴から陶邑古窯跡群のTK208型式に属するものと判断される。

古墳築造と廃棄が近い埴輪から考えると、川西宏幸の編年によるⅤ期に位置付けられ、また先に類似する埴輪が出土する古墳としてあげた貝徳寺古墳・小正西古墳ともに出土須恵器や石室の形態から5世紀末から6世紀初頭に位置付けられるものと考えられており、今回の調査成果は第1次調査の検討を補強するものといえよう。

【参考・引用文献】

甘木市史編纂委員会 1984 『甘木市史資料』考古編
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
岸本　圭 2003 「九州の円筒埴輪にみられる各種技法」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
那珂川町教育委員会 1987 『貝徳寺古墳』那珂川町文化財調査報告書第16集
福岡県教育委員会 2001 『山ノ上遺跡　赤坂古墳群』福岡県文化財調査報告書第164集
穂波町教育委員会 2000 『小正西古墳』穂波町文化財調査報告書第12集

図 版

1 遺跡の立地（南上空から）

2 遺跡の立地（北上空から）

図版2

1 調査区とその周辺
（上空から）

2 調査区からクワンス塚
古墳を望む

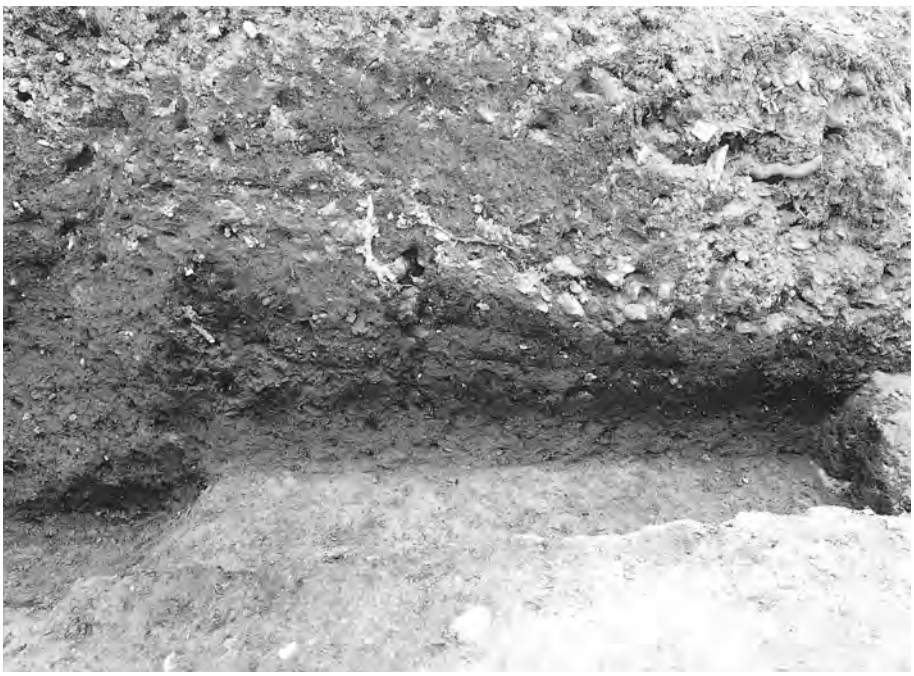
1 調査区全景
（南から）

2 調査区全景
（上空から）

図版4

1 墳丘調査前状況

2 墳丘断面全景



3 墳丘版築状況

1 周溝葺石転落状況

2 周溝完掘状況

3 葺石除去状況

図版6

1 周溝堆積状況
(A－A')

2 周溝堆積状況
(B－B')

3 円筒・人物埴輪
出土状況

12

16

17

18

4

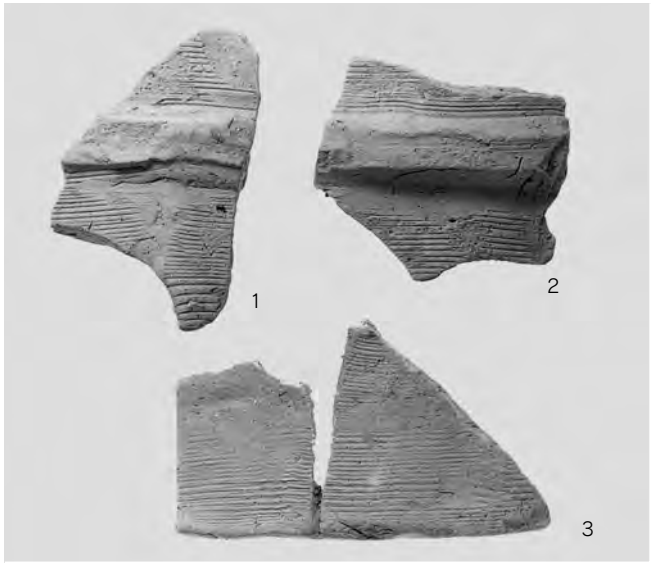
23

24

27

29

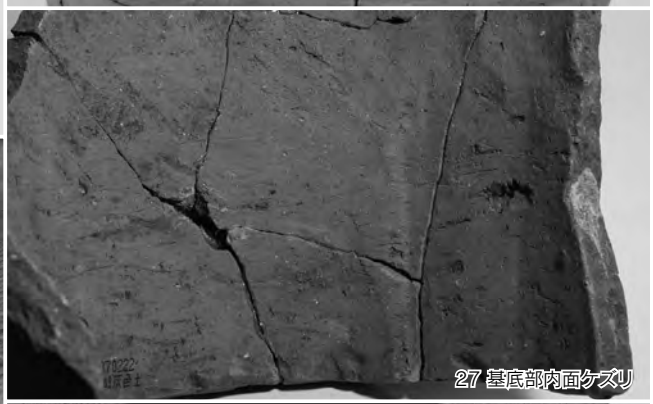
周溝出土円筒埴輪



12 ヘラ記号

17 ヘラ記号

25

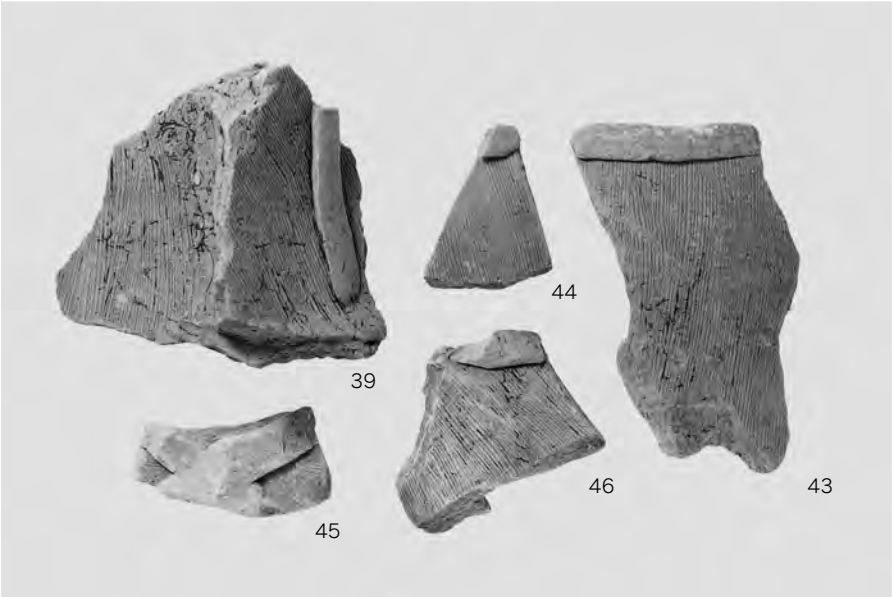

27 基底部内面ケズリ

25 円形押圧拡大

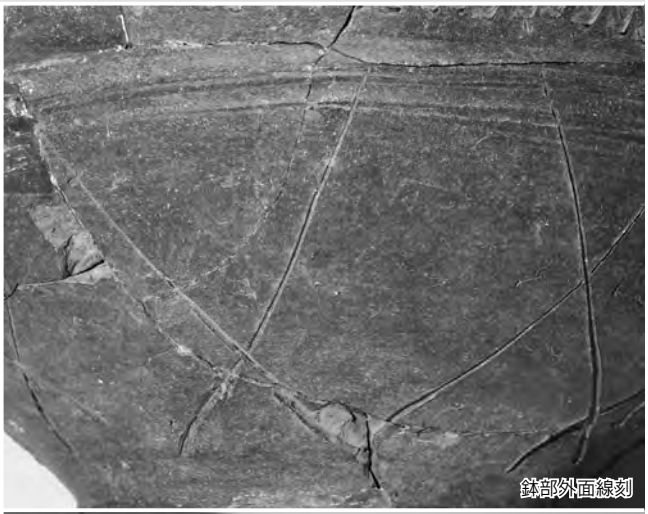
12 底部調整

16 底部調整

周溝出土円筒埴輪



周溝出土形象埴輪



周溝出土須恵器器台

報 告 書 抄 録

ふりがな	あかさかこふんぐん2
書名	赤坂古墳群2
副書名	一般県道飯江長田線関係埋蔵文化財調査報告
巻次	2
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第220集
編著者名	岸本　圭、下原幸裕
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡市博多区東公園7-7
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
あかさかこふんぐん 赤坂古墳群	ふくおかけん 福岡県 みやまし みやま市 やまかわまちしみず 山川町清水	402290	630006	33° 07′ 50″	130° 30′ 45″	2007.1.23 ～ 2007.2.26 2007.8.24 ～ 2007.8.28	160	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤坂古墳群	墳墓	古墳時代	古　墳	埴輪・須恵器	前方後円墳

要約

赤坂1号墳の周溝が確認され、墳丘は大半が削平を受けるものの一部で版築による盛土が検出された。周溝からは円筒埴輪・形象埴輪（人物・家・盾）・須恵器が出土した。人物埴輪は精美なつくりであり、畿内の工人の関与が想定される。須恵器の器台は鉢部に線刻を連続して刻み、朝倉古窯跡群で焼成されたものと判断される。周溝の平面形から赤坂1号墳は前方後円墳であり、隣接するクワンス塚古墳の1/2の規格で構築されている可能性が指摘できる。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 19	登録番号 12

福岡県文化財調査報告書第220集

赤 坂 古 墳 群 2

平成20年3月31日

発　行　福 岡 県 教 育 委 員 会
　　福岡市博多区東公園7-7

印　刷　三 栄 印 刷 株 式 会 社
　　福岡市博多区千代1-6-1